ケース 1

40 歳になるあなたは地方の中核市である海沿いの A 市に暮らしている。実家は隣の B 市にあり、東京の大学を卒業後は A 市内のメーカーに就職し、勤務している。現在の住まいは A 市内にあり、新生児を含む子ども二人と妻の 4 人家族で暮らしているが、今年中に B 市に移る予定だ。勤務している会社には転勤がないため、今の家賃を払い続けるよりも家を建てるほうが良いと判断し、新居を買うことにしたのだ。両親からの子育てのサポートを受けやすいことや、将来的に両親の介護問題なども考えた末、通勤時間は多少長くなるものの隣の B 市を選んだ。会社の制度を利用して金利の低いローンを組み、育児で忙しい妻とコンセプトをすりあわせ、煩雑な設計会社とのやりとりを終えたときは心底ホッとした。

あなたがクリスチャンになったのは東京の大学に行っているとき、友人から学生クリス チャンの集まりに誘われたのがきっかけだった。特にキリスト教的な背景のなかったあな たがなぜあのとき、すんなりクリスチャンの集まりに顔を出したのかはいまだに自分でも 分からない。じっさい、集まりに参加した際も、「交わり・恵み・ゆだねる」など、普段聞 き慣れない単語が多用されていて薄気味悪さを感じたほどだ。敢えて言うなら、高校生の時 に読んだ三浦綾子の「道ありき」が忘れられず、そこに書かれているようなまっすぐな生き 方や信じるものを共有できる結婚へのあこがれがあったのかもしれないと今では思う。当 初は恐る恐る足を踏み入れた世界だったが、自分を誘ってくれた友人の所属する教会で洗 礼を受けてからは「キリストと出会い救われた」という大きな喜びに包まれ、伝道への熱い 情熱を持つようになった。KGK (キリスト者学生会) のキャンプに同じ学部の友人を誘い、 友人のひとりが洗礼を受けたときには自分のとき以上の高揚感と喜びに包まれた。「人の永 遠の行き先に影響を変える」という伝道の働きを職業にしようかと一時期、半ば本気で考え、 全国青年宣教大会でスピーカーが「献身の召命が与えられた人は今、前に進み出てください」 という「献身の招き」をしたときには、座っていた椅子から腰が半分浮いていた。今でも「あ のとき前に進み出て神学校に行っていたら、自分の人生はどうなっていたんだろう・・・」 と時々空想することがある。

現在所属している A 福音教会の副牧師はあなたと同じ年生まれで、あのときの青年宣教大会の同じ会場におり、前に進み出たひとりだったと聞いたときは運命の巡り合わせのように感じた。それ以来、副牧師はあなたにとって「あのとき前に進み出たらそうなっていたかもしれないもうひとりの自分」のように感じ、他人とは思えない。フットサルが共通の趣味ということもあり、彼が 20 代前半の神学生時代から「親友・同志」のように感じている。やがて彼が伝道者となり、教団からの按手礼を受け副牧師となり、互いに家庭を持つようになっても、年に何度かは一緒に食事をして語らいあう。そのときだけは彼のことを「先生」

とは呼ばず、ファーストネームで呼び合う。先月も副牧師宅で行われた家族ぐるみのお好み焼きパーティで、あなたは彼から「ケープタウン決意表明」という小冊子をプレゼントされた。副牧師は去年からこの小冊子を読み込んでいるらしく、自分の小冊子はメモ書きでボロボロになっていた。彼は言った。「これまでの教会観・伝道観では、21世紀の世界には届いていかないというのは神学生時代からうすうす感じていたけど、この小冊子を読んだとき、自分の心を代弁してくれるように感じたんだ。僕はこの先の牧師人生で、この小冊子に書かれているような教会観・伝道観をもった教会を建て上げていたいと願っている。」普段あなたが読む本は仕事関係の専門書か、ベストセラーのビジネス書ぐらいなので、この手の本は読み慣れていない。その日もいつも通り、SNSをチェックしてから寝ようかと思っていたが、枕元においてあった「ケープタウン決意表明」が妙に気になって、ページをめくってみた。冊子の中程に、「真理と職場」という節があり、そこにはこう書いてあった。

「成人のクリスチャンがクリスチャンでない人と最も多くの人間関係を持っているのは職場であり、そこには伝道と変革のための膨大な機会があるにもかかわらず、この機会をとらえるために信徒を整えようというビジョンを持った教会は少ない。」

この文章を読んだとき、体に電流が走ったような感覚があった。「職場には伝道と変革の ための膨大な機会がある」、これまで考えたことも無かったことだった。冊子には他にも、 一般信徒であっても取り組めるような広い意味での「宣教」について多く記載されていた。 読むにつれ、クリスチャン社会人としての自分にも何か使命があるように感じた。これまで あなたは職場ではクリスチャンであることを公言してはいたが、敢えて前面に出している わけではなく、直接的に伝道をしたことはない。大学とは違い、職場は伝道をするような場 所ではない、と心のどこかで「腑分け」していたからだ。メーカーでの営業や商品開発が宣 教とつながるイメージもなく、仕事はあくまで仕事として考えてきた。 相手が顧客であれ同 僚であれ、「職場での伝道はタブー」だと。この 10 年以上、このまま「日曜日だけのクリス チャン」を続けていくのでよいのだろうかという悩みもあったが、教会の伝道活動に積極的 に関わってきたわけでもない。平日の仕事終わりに活動に参加する気力も無かったし、週末 はなるべく家族とゆっくり過ごすことを心掛けてきたからだ。たまに学生時代に抱いた伝 道への情熱がうずくことはあったが、「自分は牧師や宣教師ではなく一般信徒なのだか ら・・・」と自分に言い聞かせることでうまく折り合いを付けてきた。「自分の役割は教会 や宣教団体に献金をし、副牧師のような人々のために祈ることで宣教活動を後方支援する ことだ。」

次の日、あなたは行動を起こした。職場の同僚のためにとりなしの祈りをするための「祈りのリスト」を作成し、会社に行く前に同僚たちのために祈り始めた。翌月からは、次第に同僚たちに信仰のことや聖書のことをさりげなく話すようになっていった。平日夜の教会

活動にも積極的に参加するようになり、もともと伝道活動に熱心だった教会員とともに、自分たちの教会でも何か宣教や社会奉仕につながるような新しい事業を始められないかと話し合うようになった。教会や信仰について興味を示していた一人の同僚もその話し合いに来るようになり、ついには礼拝にも出席するようになるなど、社会人になってから初めて「伝道」に関わっているという自信を持てるようになった。昼も夜も、平日も週末も、すべてが「主に仕えている」という感覚に満たされた日々を過ごすようになった。そんなあなたの情熱が感染したのか、妻も子どもたちも教会の礼拝や活動への参加が積極的になり、休日などに家庭礼拝を持つなど、「神を中心とした家族」というあなたの理想は今まで以上に可視化されはじめた。

そんな中、あなたの仕事の業績が徐々に落ち始めた。教会関連の活動が増えるにつれ、メーカーでの職務に対する使命感が薄まり、明らかに仕事へのモチベーションが低下していたのだった。部長に呼び出され、最近の状況について話をした際、「職場で宗教のことを色々言っているようだが、それはまずいんじゃないか。班のリーダーでもあるあなたには影響力や発言力があるのだから、そういったこともわきまえていただかないと・・・」と釘を刺された。管轄する部署の業績低下との関連の可能性も指摘され、あなたは反論できなかった。部長には「まあ、個人の信条は自由だから何を信じてもいいけど、職場とはきっちり分けてくれよ。仕事は仕事で頑張ってくれ。君のチームには期待してるんだから。」と発破をかけられた。

あなたは、仕事と教会活動との間で悩み始めた。いまの自分は、職場でマイナスの証しを していることになるのではないか。職場ではきちんと結果を出していた以前のほうが良い 証しになっていて、そのことのほうが神に奉仕していたということになるのではないか。で も、教会活動に関わっているときの充実感を思うと、「いや、これでいいんだ。仕事よりも、 教会だ。伝道こそが自分に与えられた使命なんだ。部長からの苦言はサタンの妨害なのかも しれない・・・」とも思ってしまう。

クリスチャン社会人として、自分は何をすべきなのか。

設問1.この主人公の行動について、批判的に議論してください。

設問2.この主人公はこの後どう行動すべきなのか議論してください。